



慶應義塾大学ビジネス・スクール

慶應義塾大学先端生命科学研究所(B)

5

— 研究所発 2 つのバイオベンチャー —

慶應義塾大学先端生命科学研究所は 2001 年に山形県鶴岡市に創設された研究所である。コンピューターサイエンス・電気工学・分子生物学に精通した富田勝所長が提唱する「統合システムバイオロジー」の構想のもと、同研究所は活発な研究活動を行い成果を挙げていた。2011 年現在、137 名の研究・技術・事務スタッフを擁し、年功にとられない実績重視の有期雇用制、若手重視の人材活用、既存の研究分野の壁を超えた柔軟な組織体制によって、ユニークな研究所運営を行っていた。同研究所の曾我教授が発明し 2003 年に特許を取得したメタボローム解析技術は世界最先端の技術として世の注目を集め、多くの医療機関・研究所・企業が同研究所との共同研究に参加し、がん等各種疾患の早期診断に役立つバイオマーカーを発見するなど多くの成果を挙げた。同研究所は地元自治体や企業と共同で「鶴岡メタボローム・クラスター」構想を打ち出し、バイオ関連の産業創出と地域経済の活性化を長期的目標としていた。

10

15

研究所創設 2 年後の 2003 年には、富田所長と曾我教授を創業者とするバイオベンチャー、ヒューマン・メタボローム・テクノロジーズ社をスピンオフした。同社は創業 8 年目によく業績を黒字化し、ジャスダック上場の準備に入っていた。また 2007 年には、慶應大学湘南藤沢キャンパス (SFC) の大学院生、関山氏をリーダーとする学生ベンチャー、スパイバー社をスピンオフした。同社はクモ糸の人工合成に成功し、“夢の繊維”の工業化を目指して研究体制の強化と資金源の確保という課題に取り組んでいた。B ケースでは、研究所発の 2 つのバイオベンチャー設立の経緯、経営陣の編成とその意見、当面する経営課題を記述する。

20

25

このケースはクラス討論のための資料として、慶應義塾大学名誉教授石田英夫が作成した。ケースは組織体のマネジメントの適切または不適切な処理を例示しようとするものではない。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール (〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1 番 1 号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp)。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法 (電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない) による伝送も、これを禁ずる。

30

Copyright© 石田英夫 (2011 年 11 月作成)